

レズビアン ゲイ バイセクシュアル トランスジェンダー

LGBTの子どもと周りの大人たちへ

今までの教育や社会生活の中で、私たちは、セクシュアリティ（人間の性のあり方）について正しく学び、理解する機会があっただろうか。

最近、「LGBT」という言葉をよく聞くようになったが、多くの人が意味や内情を理解し、十分な知識を持っているとは決して言えない。LGBT当事者が抱える問題についても、関心がない、自分には関係ない、と思っている人が多いのではないか。

最近、ある図書館で「王さまと王子さま（注1）」という絵本に出合った。王子と王子が結婚するという話ののだが、「絵本」の棚ではなく「医療」の棚に配架されていた。調べてみると、

会話の中に子ども

僕が子どもだった80年代から90年代は、テレビ番組に、ゲイやトランスジェンダーなどのセクシュアリティを大げさに誇張するキャラクターが出ていたり、からかうようなコーナーがありました。リビングで家族とテレビを見ている時、家族が「気持ち悪い」「やだよね」「あり得ない」と言うのを聞いて、とても辛かった思い出があります。自分は気持ち悪い存在なのだろうか。ここにはいけない存在なのだろうか。僕は本当に生まれてきてよかったのだろうか。ゲイに対してネガティブな発言は言っちゃいけないと思っていました。

そんなことから、自分がゲイであることは家族には絶対に言えない、ばれてはいけない、心の奥に何重にも鍵を掛け、絶対に見つからないようにしていました。

38歳になった今、同性のパートナーとケンカもしながら、毎日楽しく14年間共に暮らしています。周りには友人達もたくさんいます。今は「同性愛者として生まれてきてよかった」と思っています。そして、あの頃の僕に「大丈夫、今は少し辛いかもしれないけど楽しい未来が待っているよ」と声を掛けてあげたいです。

どうしたら子どもたちに「ありのままのいいんだ」ということが伝えられるのでしょうか。性的指向が同性に向く人（レズビアン・ゲイ、両性に向く人（バイセクシュアル））がいるというのを、学校や家庭で、少しでも普段の会話に入れてもらえたら、と思います。そんな話を小さい頃から聞いていれば、「同性や両性を好きになる人もいる」という知識が持てると思

にじいろ安場 in 浜松代表 大畑智矢さん（ゲイ）

ます。大人とのちよつとした会話や話に、多様な性に対するワードが出てくれば、悩みを抱える当事者である子どもは、「自分はここにいられない人かもしれない」と、思えるはずですよ。

学校では、保健室がセーフティネットとして機能してほしいと思っています。子ども時代、学校でも自分の身を守る術がなく、教師の何気ない発言で「自分はいけないのだろうか」と感じ悩むことが多くありました。セクシュアリティの啓蒙・啓発ポスター1枚、保健室の前の廊下に貼ってあるだけで、「困ったら飛び込むところがある」「ちゃんと守ってくれる大人がいる」というメッセージが、助けを必要としている子どもに伝わるはずですよ。

自分の性的指向をカミングアウトすることは、実は、友達よりも親にする方がぐつとハードルが高いです。友達は受け入れてもらえなければ会わない選択もできますが、親は違います。親はずっと親だし、繋がりは切れない。「家を出て行け」「子どもじゃない」と言われたら、本来一番安心できる場所であるはずの「家」という「居場所」がなくなってしまう。もし、周りにレズビアンやゲイ、バイセクシュアルで悩んでいる子どもがいて、カミングアウトされたり、それはとても決心や勇気がいることだと受け止めてあげてください。

そして「あなたはあなたのままのままでいいんだよ」と、声を掛けてあげてください。そこからがスタートです。自分の子どもからカミングアウトされたら、心の準備ができてからでいいので、たくさんセクシュアリティについて一緒に話して合ってください。僕の小さな願いです。

誰よりも「うちの人」として

私は現在、パートナーと子どもの3人で暮らしています。子どもは小学校高学年ですが、積極的に自分たちのセクシュアリティを伝えるようなことはしていません。「当たり前」に私たち2人が一緒にいる姿を見せたいと思っています。そして、異性愛のカップルと同性愛のカップルは、何も変わらないということを私たちから感じてほしいのです。

子どもには、男女の隔たりなく、誰とでも「ひとりの人」として接することができるようになって欲しいと考えています。隣にいる人が、どんなセクシュアリティであっても「特別」なことではなく、その人との接し方にセクシュアリティは関係ないことを、身近にあることとして感じてほしいと思っています。

最近LGBTの話題がメディアで取り上げられ、子どもも目にするようになってきました。自ら聞いてくるような時は、きちんと答えられるようにしています。

「パートナーとお母さんは同性だけど、お互いを大切に思って支え合っているから生きているよ。お母さんと同じように、パートナーもあなた（子ども）のことを大切に思っているよ」ということを伝えていきます。

それとともに、普段から、子どもにも私の当事者の友達と交流を持たせて、より身近に自然とLGBTを浸透させていくようにしています。



他の市町の図書館の多くは「絵本」のコーナーに置かれているのがわかった。ゲイの結婚を描いた絵本は、この図書館ではなぜ絵本のコーナーに置かれなかったのだろう。子どもでも気軽に手に取ることができるのが絵本であるはずなのに、それを意図して作られた絵本であるはずなのに。子どもたちにとって、広い世界を知るきっかけの一つに絵本がある。そんな絵本から、さりげなく、レスビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダーなどの、多様な性について知る機会があればどんなにいいことか、と思う。そして、このことについて、私たち大人ももっと知る必要がある。

実際、学校の教室の中には、自分の性別に違和を感じることや、同性に惹かれることに、悩み傷つきながら、誰にも相談できずにいる子どもたちがいる。

子どもが成長していく中の、思春期の頃は性が揺らぐ。子ども自身の気持ちに添ったジェンダーアイデンティティが確立できるようにするには、周りの大人のサポートが必要なのだ。子どもが社会に受け入れられ、自己肯定できるように寄り添い見守るのが大人の役割といえる。

それぞれの人のありのまま、を知り、セクシュアリティについて考え、受け取ってほしい。

(國井良子)

注1:王さまと王さま

リンダ・ハーン/スタン・ナインド文・絵
アンドレア・ゲルマー訳、眞野豊訳

ホット出版2015年

自分らしく生きるという

『今日と同じ明日しか見えなくて絶望する』
もしも君がそんな気持ちで生きていくとしたら、その気持ち良くわかるよ。「こんな変な性別の人は世の中に自分ひとりじゃないのか」「ひよっとしたらオトナになれないんじゃないか」「僕は子どもの頃そんな風に思っていたよ。でもね、オトナになった。オトナになったら世界は広がったよ。今日とはちがう景色があるし、そこには仲間がいた。君も自分らしく生きられる明日がきつとくる。だから、今日死ぬのはナシにしよう。生きていてほしい。』

これは、戸籍や身体の性別と、性自認(自分で自分の性別のことをどう思っているか)が一致しない違和感に苦しんでいる、トランスジェンダーの子どもたちに伝えたいことです。

僕は4歳以前から、自分の身体が「女の子」であることに違和感がありました。自分のことを「完全な女の子」とも「完全な男の子」とも思えず、漠然と「どちらでもない」男の子の間?」と思ってきました。当時は理解する言葉さえもなく、正確な情報や、同じ仲間と出会う機会ほとんどなかったため、「性別のことは人には言っはいけないこと」だと思ひ「考えても仕方のないこと」だと思ひました。そんな中で「自分らしく」ということはとても大変なことでした。それは、今の子どもたちにとっても同じことでしょう。

性別の違和感に苦しむ子どもたちにとって、自分の身体は「最も自分らしくないモノ」の代表みたいな存在です。そんな「変な自分」のことを周りが理解して、支えてくれるとは到底思えないのです。

大人になり仲間ができ、いろいろな経験をして、自分を受け止めることができるようになるまで、実に40年かかりました。色々と調べ動いて、失敗して傷つきながらも、東京の信頼できる専門医の先生にたどり着きました。カウンセリングを受け、性同一性障害の診断をもらいました。ホルモン注射が始まり、乳腺摘出手術を終えたのが2年前のことです。今でも3か月に2度、東京の病院へ行き専門医の診察と検査を受けます。その結果を基に、浜松市の病院で2〜3週間に1度のホルモン注射を続けています。同じ浜松市といっても家が山の中なので、病院まで片道車で2時間半かかります。治療費も今のところ全額自己負担です。この注射は一生続けていかなければなりません。時間も労力もお金もかかります。それでも、自分らしくいるためには必要なことです。100%男性の身体になれるわけではないけれども、少しずつ「普通のおっさん」として生活できるようになりました。

最近「浜松トランスジェンダー研究会」を立ち上げました。色々な分野の専門家や、トランスジェンダーに関心のある人を巻き込んで、当事者の生活上の問題を解決していくこととする動きを探っています。ひとりではできないことも仲間とならできるかもしれない。そう思っています。

性別を越境して生きることがおかしなことではありません。性別に違和感があり苦しんでいる子どもたちが、その気持ちを隠す必要がなく、安心して毎日生活できる。そして、誰もが自分らしく生きられる世の中になるといいな。そう思います。

用語

◆セクシュアリティ

身体と心の両方に関わる、人間の性のあり方

◆性自認(ジェンダー・アイデンティティ)

自分の性別を自分自身でどう認識しているか。

◆性的指向

(セクシュアル・オリエンテーション)

自分はどうな性別の人を好きになるか。

◆LGBT

L レズビアン

女性として女性が好きの人。

G ゲイ

男性として男性が好きの人。

B バイセクシュアル

男性・女性の両方を好きな人。

T トランスジェンダー

身体の性と性自認(自分で認識している自分の性別)が一致しない人。

性同一性障害を含む場合もある。

◆MTF エムティーエフ

男性の身体で生まれたが、服装や社会的な性別、身体的性別を「女性」へ移行した人。

女性として生きたい人。

◆FTM エフティーエム

女性の身体で生まれたが、服装や社会的な性別、身体的性別を「男性」へ移行した人。

男性として生きたい人。

◆性同一性障害

出生時に割り当てられた性別と性自認が異なり、苦悩している状態が続くことを表す疾患名。性別違和ともいう。



覚えて
いますか？

『ねつとわあく』の表紙とともにふりかえる男女共同参画と流行語



創刊号・9号・11号・21号表紙

- ◆ 国・県の男女共同参画のあゆみ
- 女性・男女共同参画関係の流行語・ベストセラーなど

- 1982 (S57) ◆ 「ねつとわあく」創刊
 - 窓ぎわのトットちゃん (黒柳徹子)
- 1986 (S61) ◆ 婦人のための静岡県計画 策定
 - 「亭主元気で留守がいい」「家庭内離婚」
- 1989 (H1) ○ アグネス論争
- 1990 (H2) ◆ 高等学校、家庭科男女必修となる
 - セクシャルハラスメント、濡れ落ち葉

『ねつとわあく』70冊から見る時代の流れ

「婦人」から「女性」、その生き方へ 「男と女」、そして……？

■ 「婦人」から「女性」、その生き方へ

1982 (昭和57) 年10月、静岡県が婦人情報を広く知らせ、県民とともに考えていく婦人のための情報誌として『ねつとわあく』は創刊されました。創刊以来『ねつとわあく』は、県民から公募した一般の編集員が企画・編集する形態の男女共同参画の広報誌として36年間続いています。

創刊号の編集に携わった編集員は31歳から48歳の既婚女性5人。家事と育児中心の日常に変化を求めて……くらいの軽い気持ちで応募した編集員でしたが、原稿の執筆には女性問題への深い知識と幅広い認識が求められました。初代編集員のひとりだった現・あざれあ交流会議グループ代表の大國田鶴子(おおくに たづこ)は当時こう書いています。
これでもかこれでもかかと疑問を提起、啓発してくる三人の県職員の方にタジタジ。時には「あの人は角が生えているのでは」と思ったり。なにくそまけるものかと読んだ本は五十冊以上。

【2号あとがき・1983 (昭和58) 年2月発行】

初期の記事で繰り返し特集される「婦人」の生き方。「男性社会」(創刊号あとがきより)の中で、女性が結婚して子どもを産み、家庭を守り主婦としての役割を求められていた時代、家事を怠らない範囲で働いた上でより良い生き方を求める、ということが基本メッセージとして

記事に反映されています。

1987 (昭和62) 年11月発行の11号で、初の20代編集員が登場。誌名横のサブタイトルも「婦人のための情報誌」から「女性のための情報誌」となり、表紙デザインも創刊以来初の変更となりました。

特集テーマの選び方やタイトルも硬く、婦人問題が特別な問題であった10年前。今は、婦人問題そのものより生き方へと視点が移っています。

【20号あとがきにかえて、編集員連名・1992 (平成4) 年3月発行】

■ 『ねつとわあく』、男を考える

これまでの『ねつとわあく』は女性の意識を変えようとしてきましたが、これからの10年でまだ変わっていない男性の意識を変えてゆき、それが男女共同参加型の実現に役立てばいいですね。

【14号あとがき 斎藤智世 1989 (平成元) 年3月発行】

『ねつとわあく』が、配偶者としてではない個人としての男性の存在に目を向けるようになった最初の特集は、1988 (昭和63) 年3月発行の12号「男の自立 女の自立」。記事にはふたりの男性、軍隊で炊事洗濯掃除を仕込まれたという大正生まれのひとり暮らしの方と、家事を自然にこなす40歳の新聞記者が登場します。
その後、時代の流れを受けて『ねつとわあく』

- 1993 (H5) ◆ 静岡県女性総合センター あざれあ 開館
- 1994 (H6) ◆ 総理府 男女共同参画室設置
 - ヤンママ/契約スチュワーデス
- 1995 (H7) ◆ 育児・介護休業法 成立
- 1999 (H11) ◆ 男女共同参画社会基本法 公布・施行



23号・29号・36号表紙



40号・44号・45号・52号 表紙

- 2001 (H13) ◆県男女共同参画推進条例公布・施行
○ドメスティック・バイオレンス (DV)
- 2002 (H14) ◆県、配偶者暴力支援センター設置
- 2004 (H16) ◆静岡県男女共同参画センターあざれあ、に改称
- 2008 (H20) ○アラフォー、後期高齢者
- 2010 (H22) ○イクメン

近年の『ねっとわあく』は、特集テーマも幸福論・介護・防災・子ども・パートナーシップ・多様性社会などさまざまです。初期の頃の、家

■ここ数年、そして これからの『ねっとわあく』

庭と夫婦を基本にした男女の関係を考えるところから、時代とともに内容が変わっていきました。さまざまな人間関係のあり方を見つめ時代の移り変わりや行政施策を底流に置きながら編集されています。そして、編集員一人ひとりの日常の実感を加えながら号号異なる色合いの誌面を作り上げています。

昭和〜平成初期に編集員に応募した女性にとつて、広報誌の編集は貴重な社会参加の機会であり表現の場であることが、誌面からもわかります。東部地区の伊豆・御殿場エリアや西部地区の天竜エリアから片道3時間以上かけて静岡市にやってくる会議に参加する編集員もいました。

しかし、現在は都市に出てこなくても意思や考えを表現する場や手段も多様に存在し、自己実現の場も広がって、編集員のモチベーションも創刊当時とは変わりつつあるように思います。発信される情報も必要な人のもとに届くよう、より一層の検討や努力が必要です。多様性時代を意識しつつ男女共同参画社会の実現に向けて、情報が必要とされる人の元に届くよう、編集員の執筆内容への細やかな配慮や啓発への努力が求められています。

代々の編集員の方々が作ってきた『ねっとわあく』70冊のバックナンバーは、あざれあ図書室やあざれあナビ (<http://www.azaree-navi.jp/>) でも閲覧可能です。ぜひご覧ください。(肩書等は当時、文中敬称略)

(金澤美幸)

- 2011 (H23) ◆あざれあナビ (静岡県男女共同参画ポータルサイト) 開設
- 2013 (H25) ◆県、男女共同参画の視点からの防災手引書発行
- 2014 (H26) ◆『『女性が輝く社会』の実現』(日本再興計画改訂 2014)
○マタハラ (マタニティハラスメント)
- 2016 (H28) ○保育園落ちた日本死ね

参考資料：ねっとわあく vol.68「日本と静岡県の男女共同参画のあゆみ」
平成 28 年度 静岡県男女共同参画白書 ユーキャン新語・流行語大賞



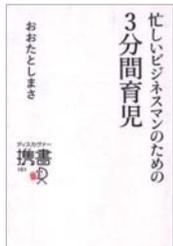
56号・65号・67号・69号 表紙

あざれあ図書室にある おすすめの本を紹介します!



『10代のうちに知っておきたい 折れない心の作り方』

(水島広子 紀伊國屋書店 2014年)
SNSトラブルや親との関係など、10代が抱えるさまざまな悩みから生じる“イヤな気持ち”。その扱い方を知ること、心を守って自分らしく生きるヒントを教えます。



『忙しいビジネスマンのための 3分間育児』

(おおたとしまさ ディスカヴァー・トゥエンティワン 2013年)

家族との時間は量より質! たった3分間、子どもや家庭に意識を向ける時間を持つことで、自分自身の価値観が変わります。子育てのヒントがいっぱい、忙しいパパにおすすめです。



『女の子が生きていくときに、 覚えてほしいこと』

(西原理恵子 KADOKAWA 2017年)
長い人生、転んだ時にどう立ち上がるか。目指せ、お寿司も指輪も自分で買える女の子!“毎日かあさん”でおなじみの西原理恵子さんが女の子へのメッセージを綴ります。

(利用案内)

貸 出：図書5冊、ビデオ・DVD2本(2週間)
*貸出カードが必要です。現住所、生年月日を確認できる身分
証明書をお持ちのうえ、カウンターにてお申込みください。
開室時間：平日 9:00~18:00 土日祝 9:00~17:00
休 室 日：第1・3・5日曜日、図書整理日
T E L：054-255-8763
F A X：054-255-8759



編集後記



後列左から 酒井美優 金澤実幸 須藤八千代
前列左から 藁科可奈 國井良子 赤堀三代治

●LGBT当事者と出会って、世の中の普通=多数派なのだと気づいた。以来「普通」という言葉を使う時、「普通」が指すものを意識するようになった。何気なく使ういつもの言葉が、目の前にいる人を傷つけているかもしれない。そのことを意識して言葉を選びたい、と思うこの頃。
(編集長 國井良子)

●69号では編集員として自分を前に出すことは抑えましたが、70号では手法を変え、当事者としての私の切り口を前面に出して記事化してみました。どこまでテーマに迫ることができたか一抹の不安はありますが、自分の中ではこれからの生き方を方向づけるよい機会となりました。感謝、感謝です。
(赤堀三代治)

●『ねっとわあく』バックナンバー69冊を読み、見出しをまとめリストを作って、特定のテーマでピックアップする作業、時間はかかりましたが楽しかったです。過去の編集員の思いや時代の流れを、記事に反映させることができたでしょうか。そして、自分も次世代の編集員に思いを伝えることができたらと願っています。(金澤実幸)

●自分のジェンダーに関する理解を深めるために参加させて頂いたのですが、企画を作っていく中で「誰にでもわかりやすく伝える」ということの大切さを学ばせて頂けたと思います。それは、現在執筆中の修士論文を仕上げるうえで大切な経験となったと感じるので、生かしていきたいです。
(酒井美優)

●何の予断もなく新しい人と出会い、2冊の「ねっとわあく」を創る。このシンプルな時間と作業を楽しんだ。広報誌というモノだけでなく新しいヒトを手に入れた。その大きな贈り物に感謝している。70号、いかがでしたか?
(須藤八千代)

●私にとって「ねっとわあく」への参加は『子育ての一環』だ。人生の先輩方から託された希望のたすきを胸に、より良い社会を残すために声を上げ続けたい。その背を見て子は育つと信じている。そして将来、「お母さんはできるだけがんばった。次はあなたたちの番だよ」と彼らにつなぐのだ。
(藁科可奈)

編集員募集

募集人員/若干名
仕事内容/情報誌「ねっとわあく」(年1~2回発行)の企画・取材・原稿案の作成・編集から発行まで
作業会場/静岡県男女共同参画センターあざれあ
募集締切/平成30年4月9日(月)まで
応募書類/応募用紙、作文「私のつくりたい男女共同参画情報誌」(1000字以内)で選考
その他/1号発行につき3万円。別途、会議や取材などの交通費支給
問合せ先/あざれあ交流会議グループ
T E L 054-250-8147
E-mail info@azarea-navi.jp

静岡県男女共同参画ポータルサイト
あざれあナビ



ねっとわあく

2018/3/15 Vol.70

発行日/平成30年3月15日
企画・編集・発行/あざれあ交流会議グループ
〒422-8063 静岡県駿河区馬淵1丁目17-1
TEL/054-250-8147 FAX/054-251-5085

編集長/國井良子
編集員/赤堀三代治/金澤実幸/酒井美優/
須藤八千代/藁科可奈

表紙/MARELLI
印刷/株式会社 石垣印刷